

作／田口浩一郎

傾斜空間 第七回公演

金沢総宜楼酔譚

三人の男がちやぶ台を囲んでいる。台上には数本の徳利が転がり、すぐに横になれるように蒲団が敷いてある。男たち、無精ひげ。彼らの中心には一冊の冊子。全員、哄笑。

毅　しかし、あの時の伊藤さんには参った。

堅太郎　ああ、あの大事なときに芸者を挙げてどんちゃん騒ぎをやっているんだからな。

巳代治　はは、そいつは僕も拝みたかった。

堅太郎　ああ、あの時巳代治はいなかったっけ？

巳代治　ええ、子供にやまだ早いつてどやされましてね。∴留守番ですよ。留守番。

毅　子供って、お前∴。俺たちとそう変わりやせんだろうに。

堅太郎　井上さん、私も一緒にされたくないなあ。

毅　堅太郎、お前今いくつだ？

堅太郎　当年とつて34になります。

毅　なーんだ、じゃあ俺と9つしか違わんじやないか。

堅太郎　9つも、ですよ井上さん。9つも。

巳代治　まあ、僕にとつてはお二人とも同じようなもんですけどね。

堅太郎　お前今いくつだ？

巳代治 今年の5月でやつと30になりました。

毅 ふん、青二才が。

巳代治 あれ、そういえば伊藤さんは？

堅太郎 お前……覚えてないのか。

毅 横濱で別れたじゃないか。

巳代治 僕は離れて潰れてたからなあ。

堅太郎 ああ……そうだったか？

巳代治 みんなメチャクチャ飲むんですもん。

毅 あの後、伊藤さんだけ先に帰ったからな。

堅太郎 井上さん、ありやあんたが悪いよ。

毅 は？

巳代治 またやったんですか？

堅太郎 もう伊藤さん言い込めるのやめなさいよ。あんた口ゲンカ強いんだからさあ。

毅 言い込めるなどと。俺は当然のことを言ったままで。

巳代治 それで伊藤さん怒って帰っちゃったんですか。

堅太郎 いつも事だけどね。

巳代治 あ、じゃあこれ、どうするんですか？

巳代治 冊子を持ち上げる。

堅太郎 明日の朝来て目を通すつてさ。それから東京に持つていくと。

巳代治 ああ、そうですか。

堅太郎 大事にしまっておけよ。失くしたら怒られるぞ。

巳代治 分かっていますよ。……ここにこの通り。

巳代治、自分の懐から袋を取り出し冊子を詰める。そして枕元に置く。

巳代治 あとはこれだけのツワモノが取り囲んで寝てますからね。万が一にも盗まれる心配

は……。

堅太郎 よおし、分かった。いいだろう。じゃあかつたるいからさつさと寝よう。

巳代治 ええ。

堅太郎 井上さん、灯り消してもらえますか？

毅 お前、年上をカンタンに使うんじゃないよ。

堅太郎 まあまあ、我々の仲でカタいこといいっこなし。

毅 しょうがねえな。

毅、灯り(石油ランプか行灯)を吹き消す。同時に照明C・O.

三人 おやすみい。

三人、しばらく動かない。すると突然ガサリという音が聞こえる。全員、飛び起きる。

堅太郎 井上さん！灯り点けて。

照明C・I.

堅太郎 何か今、ガサッという音聞こえなかったか。

三人、頷く。

堅太郎 無事だろうな…。

巳代治 無事つて…何が。

堅太郎 先刻さっきの袋…。

巳代治 当然じゃないですか。

堅太郎 どこだ…。

巳代治 …え？

三人、部屋を見渡す。先程の冊子を入れた袋が無くなっている。

巳代治 …ない。

堅太郎 さ、探せ！

全員、自分の蒲団をひっくり返して探す。

毅 自由民権派の連中め……日ごろからアレを狙っておったからな。まさかやつらが盗んだんじゃ……。

堅太郎 縁起でもないこと言わないで下さいよ。

毅 野党の手にも渡ったら更にオオゴトだぞ。

堅太郎 だからやめて下さい……。

毅 お前アレがどれだけ重要なものか分かっているのか！

堅太郎 分かっていますよ！アレこそは日本の未来を分かつもの！

巳代治 近代日本の礎。

三人 大日本帝国憲法、草案！……どこいったんだあ。

照明C・O・オープニング映像。

字幕 明治二十年夏、三年後の国会開設に向けて内閣総理大臣・伊藤博文は腹心の部下

三名と合宿を敢行。金沢八景の旅亭「東屋」にて大日本帝国憲法の草案（原案のこと）

を製作せんとする。三ヶ月に及ぶ作業の末、彼らはどうにか憲法草案を完成した。が、  
あろうことか酔っ払って眠りこけているところに賊が侵入。憲法の草案は入れていた袋  
ごと盗まれてしまう。本作はこの事実に基づいて、金沢の名旅亭「東屋」<sup>はたご</sup>での一悶着を  
余す所なくドラマ化した、ノンフィクションぽいフィクションである。

毅 探せえ。アレ無くなったら俺は辞表を書かねばならん。

堅太郎 井上さんだけじゃないですよ！

巳代治 内容が外部に漏れたら最悪伊藤さんの首だつて飛びかねない。

毅 俺達の身一つならいいさ。あの冊子一つで日本の未来が大きく変わっちゃうんだ。探  
せ！

堅太郎 はい！

巳代治 ……あ。

毅 ん？

巳代治 あつた！



巳代治、先程の袋をどこからか見つけ、差し上げる。

堅太郎 何だ馬鹿者が、心配させおつて。

巳代治 えへ、すいません。

堅太郎 一時はどうなることかと思つたぞ。

毅 中身を検める。

巳代治 またあ、井上さんは心配性だなあ。

毅 いいから、検める。

巳代治 ですから憲法草案はしっかりここに…。

巳代治、袋をひっくり返す。中から巨大なこけしに“憲法”と書いたものが滑り出る。ちやぶ台に落ちてころりと転がる。一同啞然。

三人 …。

堅太郎 なんだこれは。

巳代治 こけしですね。

毅 …うん。

堅太郎 なんだこれは！

巳代治 …憲法じゃないですね。

毅 …。

堅太郎 賊だ…賊が入った！

毅 人をおちよくりおつて…。(こけしを手取る)

堅太郎 どつから入ったんだ。

巳代治 …それも大の男三人に気付かれずに。

毅 まあ全員酔っ払ってたがな。

堅太郎 まだこの辺りにいるかもしれん。(外に飛び出していこうとする)

巳代治 どうするんですか、こんな夜中に。

堅太郎 宿中徹底的に捜す。

毅 あまり事を荒立てるな。

堅太郎 …しかし。

毅 憲法がなくなつただ泥棒が誰だと…この夜中に大騒ぎすれば世間に我々の恥を宣

伝して回るようなものだ。

巳代治 酔つて寝てる間に憲法を盗まれたなんてね。

毅 いい笑いモノだ。

堅太郎 じゃあどうするんだ。明日の朝には伊藤さんがやつてくるんだぞ。そのときに憲法は

盗まれましたじゃ済まされません！

毅 ……うーん。

堅太郎 考えてる場合じゃないですよ！井上さん。

毅 とりあえず落ち着こう。

堅太郎 井上さん！

毅 巳代治、酒まだある？

巳代治 先刻みんな飲んじやいましたよ。

毅 買つてきて。(懐を探る)

堅太郎 何言ってるんですか！

巳代治 宿の人もう寝ちゃってますよ。

毅 叩き起こせ。

巳代治 は？

毅 ……できるだけ大騒ぎしろ。宿中の人間を巻き込め。

堅太郎 ……？

毅 ワガママな役人が酒が切れたとゴネているように見せかけるんだ。いいな。

巳代治 ほう……なるほど。

堅太郎 ……どういうことですか？

毅 宿中の客を叩き起こして観察する。怪しそうなやつがいれば後でこっそりと問い詰めるんだ。宿の人間に憲法が盗まれたと感づかれる恐れはない。

巳代治 さすがです。

毅 堅太郎は近くの派出所まで走ってくれ。宿の外は畑ばかりだからこの時間に出歩いて  
いる人間はかなり目立つ。賊め外に逃げたならすぐに見つかるはずだ。

堅太郎 そういうことですか……得心しました。

毅 走れ。

二人 は。

二人、地下の袖に入る。しばらくの間。

毅 ……出てきてもいいですよ。

間。

毅 伊藤さん。

突然、舞台上の蒲団がもぞもぞと動く。中から伊藤が出てくる。(映像映写中に蒲団を被つて移動)

伊藤 よう。

毅 …伊藤さん。

伊藤 邪魔してるぞ。

毅 帰ったんじゃないんですか。

伊藤 …。

毅 口で負けて…この私に。

伊藤 …。

毅 まあいいや。…で、こんな夜更けに何の御用です。

伊藤 今日はね…井上君よ。

毅 …はい。

伊藤 君に忠告をしに戻ってきた。

毅 忠告？

伊藤 …返しなさい。

毅 は？

伊藤 憲法…返しなさい。

毅 …何のことですか？

伊藤 憲法がなくなつたのはね…知ってる。そこでずっと聞いてたから。

毅 はあ。

伊藤 盗つたのは君だね。

毅 突然出てきて何を仰るかと思えば…いきなり盗人扱いですか。

伊藤 君の気持ちは分かつておるよ。君の口惜くちおしい気持ちは良く分かつている。しかしね…。

毅 伊藤さん。

伊藤 うん。

毅 私は…確かに口惜くしゃしい気持ちでね…。

伊藤 …。

毅 あなたと議論するたびに私は…あなたをやり込めてしまうことが出来た。だから、理論家としてはあなたより私のほうが優れている自信もあった。

伊藤 うん。

毅 しかし政府内ではあなたの方が厳然と格上で…総理大臣でね…したがって幾ら私の憲法理論の方が優れているからといっても…自分のアイデアがまかり通らないだろうことは…憲法としては採用されないだろうということは…私には分かっていた。

伊藤 …。

毅 あなたのアイデアは私のアイデアを次々と押しつけてゆき、憲法草案に採用されていく。私は苛立ったし…歯がゆかったし…口惜しかった。

伊藤 …うん。

毅 だからこの仕事を投げ出してしまおうとか…憲法を自由民権派に売り渡して逐電してしまおうとか考えたことも正直ありません。正直ね。

しかし……この井上、公おおやけの仕事、憲法起草という大仕事を前に私情を差し挟むよ

うな人間でないことは……あなたにだけは分かっていただけだと思います。

伊藤 ……

毅 憲法の草案が気に入らないからといって盗人するような人間では……私はない。

伊藤 ……

毅 そうではありませんか？

伊藤 そうだよ……

毅 ……

伊藤 君の事は良く知っている。君がどれだけ堅物で、不正や汚い行いを嫌っているかも……

いや、だからこそ……だからこそね。

「このとき巳代治の「井上さん！井上さん！」という声が聞こえる。慌てる二人。伊藤、もとの蒲団の下に隠れる。巳代治、地下から階段を駆け上がってくる。胸には大徳利を大事そうに抱えている。



巳代治 井上さん！

毅 おお、巳代治。お…おかえり。

巳代治 おかえりじゃないですよ！ダメでした。

毅 は？

巳代治 首尾よくお酒を売ってもらっちゃえました。はい、これお酒。で、お釣り。

毅 あ、ああ。

巳代治 とにかく物分りのいい女将おかみで、こつちの要求を面倒臭がるどころか快く…。いやあ、

さすが老舗の名旅館だ。

毅 そりや良かったね。

巳代治 良くないです。憲法の捜索はどうするんですか！

毅 う…うーん。そうだなあ。

巳代治 このままじゃ夜が明けて盗人が逃げてしまいますよ。

毅 ……そ、そうねえ。

巳代治 でね、井上さん、僕ちよつと考えたんですけど…。

毅 おう。

巳代治 酒を出せとか酌をしるとかその程度のことじゃ、この女将は驚きやしません。

毅 う……うん。

巳代治 何かこう……ないつすかね？神をも恐れぬ要求というか……驚天動地の発想というか。

毅 ……そんな無理して。

巳代治 へこうなったら何が何でもあの懐の深い女将を困らせてやりたいんですよ。そしてこの宿全体を収拾のつかない大混乱に陥れてやりたいんです。

毅 巳代治、落ち着け。

巳代治 そうしてこそ盗人も慌てふためき、我々の前に炙り出されるつてもんでしょう。ねえ、

井上さん！（毅に背を向ける）何か良い考えはありませんか。

伊藤 芸者を挙げろ。（蒲団から顔を出して。毅は少し慌てる。）

巳代治 ……芸者。

伊藤 金沢の芸者という芸者を挙げるべしと女将に言いつける。で、この宿の客という客の部屋に送り込め！費用は政府が持つ。（毅、伊藤の被っている布団を閉じる）

巳代治 ……井上さん。（毅の方に振り向く。伊藤、顔を引つ込める。）

毅 なに？

巳代治 イイ！イイですよそれ！

毅 いや、俺は…。

巳代治 この宿のすべての客に芸者をあてがってやるんです。政府のおごりで。普通の男なら絶対に断りません。逆に言えば断った客は容疑者に当たるということです。

毅 おい、待て…。

巳代治 いやあ、さすが井上さんだ。…じゃあ、早速女将にアタックしてきます。

毅 おい…。

巳代治 待つてろよお。老舗の女将め。日本政府をなめるな！

巳代治、地下に降りていこうとする。呆然とする毅。と、巳代治、唐突に振り返る。

巳代治 井上さん。

毅 おう。

巳代治 僕はね今回の犯人…伊藤さんだという気がしています。

毅 …伊藤さん？(ちらりと蒲団の方を見る)

巳代治 だってそうじゃないですか。…伊藤さんは何か発言するたびに、必ず井上さんの反

発を受けていましたからね。……その度にあの人のアイディアは書き換えを余儀なくされて……。

毅 それは……お前、憲法は国の根幹だぞ。俺は真剣に議論しただけだ。

巳代治 それは分かってますよ。自分が上司だからって遠慮無用だと言っていたのも伊藤さんです。でもね、あの人も人間だから……。

毅 俺が悪いというのか。

巳代治 そうじゃありません。ただ、今の憲法は伊藤さんには納得行かないんじゃないかな。

丁度ね、真ん中になっちやってるんですよ。井上さんと伊藤さんの……。

毅 中途半端って事か。

巳代治 はい。

毅 ……。

巳代治 でね、多分それが許せなかつたんじゃないかなあ、伊藤さんは。

毅 でもなあ……そこまでやるか？酔っ払って憲法紛失なんて総理クビになってもおかしくない失策だぞ。自分が損するじゃないか。

巳代治 あの人、女関係以外は潔癖ですからね。似てるんですよ、そういうトコ……井上さんと。

毅 ……。

巳代治 まあ、僕の憶測ですけど……。じゃあ、余計なお話をいたしました。ご下命通りこちらのお宿を大混乱に陥れて差上げましょう。犯人は伊藤さんの息のかかった輩ですよ。恐らくね。わはは。

巳代治、興奮して伊藤の隠れている布団をガンガン蹴飛ばす。そして笑いながら部屋を出て行く。伊藤、蒲団から出てくる。

伊藤 あのこぞう儒子、痛いところをついて来よるわ。

毅 盗んだんですか。憲法。

伊藤 盗んでないよ。

毅 ……。

伊藤 ……。

毅 ……あのね。

伊藤 うん。

毅 …酒でも飲みませんか。(巳代治が持ってきた酒を示す)  
伊藤 いいね。

毅、手近にあつたぐいのみに酒を注ぐ。

毅 …伊藤さん。

伊藤 うん。

毅 …あの憲法。…盗まれた憲法なんすけど。

伊藤 うん。

毅 やっぱ伊藤さんも気に入らなかったんでしょうか。

伊藤 …そうだね。

毅、二人分の酒を注ぎ終わる。

毅 乾杯。(二人、杯を捧げる。飲む。)

伊藤 …。

毅 …。

伊藤 … 気に入らなかった。

毅 …。

伊藤 … 私は欧米に負けない文明的な憲法を作ろうと思っていたんだ。… 日本が世界の一流国と肩を並べることが出来るような。

毅 … ええ。

伊藤 しかし君ときたら二言目には日本の国柄国柄と…。

毅 …。

伊藤 日本の人情や歴史を無視して憲法を作れるなんて私も思っていない。だがヨーロッパやアメリカは日本人を野蛮人だと思っている。彼らに屈したくはないが… しかし日本の国柄を説明するような憲法を作っても彼らに対しては無意味なんだよ。野蛮人の言いに耳を傾ける気など連中にはサラサラないからね。日本人にとっては… 君の考える憲法は良い憲法だ。無理がないし、受け容れ易い。しかしある程度白人の流儀に合わせなければ日本はいつまでも彼らに相手にされない国に…。

毅 日本人も白人になるべきだというのですか。

伊藤 そうじゃない。

毅 憲法つてやつはその土地に暮らす人間の一番に守らなきゃならない決まり事、約束

事じゃないですか。であるならばその憲法は、土地の歴史、風土、人情に根ざしたものでなければならぬ。じゃなきゃあ誰も守りやしません。違いますか？

伊藤 いかにも・・・君の言うとおりだ。

毅 伊藤さんは私が言いがかりをつけるから憲法が歪んだと思っているようですね。

伊藤 いや、そんなことは・・・。

毅 だがこの私には・・・伊藤さんのアイデアはまるで欧米の憲法の猿真似に見えた。それも色々な国の憲法の都合いい部分を千切ってきて、体よく縫い合わせただけのツギハギ憲法だ。

伊藤 ……！

毅 ですがご安心下さい。先程も申し上げた通り、あの憲法草案には私のアイデアなぞ1センチメートルも入っていないやしません。：概ね伊藤閣下おおむの案文がそのまま並んでいるではありませんか。

伊藤 ……。

毅 ただ、国の在り方を根本から破壊するような案文には、私なりに徹底的に反論させ



て頂きました。少々言い回しを変えた条文もあつたかと思ひます。……しかしその程度で我慢がならないというのであれば、伊藤さんは狭量と申すしかない御仁だ。

伊藤 何だと！

毅 それとも外国の顔色ばかり窺うかがう臆病者か。

伊藤 ……言わせておけば。

毅 その上、氣に入らなければ憲法を盗むなどという卑怯な手段に及ぶとは……。

伊藤 だから、盗んでないつて。

毅 どうでしょうね。

伊藤 井上……！

毅 動機は十分だ。私には……よく分かる。

伊藤 ……。

「この時階下から、「井上さん！」という堅太郎の声が聞こえる。伊藤、再び蒲団に戻る。

堅太郎 井上さん！

毅 お、おう、戻ったか堅太郎。

堅太郎 近くの派出所から周辺の全警察に問い合わせを入れさせました。……我々が眠った時間からこちら、この街道筋には誰一人通つてはいないそうです。

毅 そうか、ご苦労だった。

堅太郎 下手人は確実にこの宿の中におりますね。

毅 そうだね。

堅太郎 念のためこの宿を包囲する形で警察官を配備しました。盗人め、いよいよ袋の鼠です。

毅 おい、あまり大袈裟に……。

堅太郎 巳代治はどうしました？

毅 ああ、巳代治なら芸者を呼びに……。

堅太郎 芸者？

毅 ああ、何でも器の大きい女将でね……夜中に酒をくれたの酌をしろだの程度じゃ大騒ぎしてくれんだそうだよ。

堅太郎 ほう、それで芸者を。

毅 盗人としてみれば朝まで大人しく待つて、他の泊り客と一緒にトンズラを決め込む

積もりなんだろうが……。

堅太郎 いいですね……。緊張感で一睡も出来ないところに突然政府の驕りだといって芸者が送り込まれる。

毅 目に浮かぶな、盗人の慌てる顔が……。 (ちらりと伊藤の潜っている蒲団を見る)  
堅太郎 ははは。

この時、階下より「井上さくん」という、やや情けない声が聞こえる。巳代治、疲れ切った様子で階段を上がってくる。

毅 巳代治。

巳代治 井上さん……。

毅 どうした。階下で大騒ぎしたしている様子もないが。

巳代治 なんですか！！あの大量の警察官は。

毅 堅太郎が手配した。

巳代治 ああ物々しくちや、やりにくくてしょうがない。

堅太郎 芸者を挙げるんだつたな。じゃあ、その手は無理か……。ごめんね。

巳代治 いやそれが……。あの女将、想像を絶する器です。

堅太郎 なに？

巳代治 金沢中の売れっ子芸者を残らず集めろという要求に対してあの女将、眉一つ動かさず……。警察の包囲網をかくぐつて、あれよあれよという間に女どもを集合せました。唾然とするこちらを尻目に全く見事としか言いようのない手際で全ての客に芸者をあてがってしまい……。その間一時間もかかっていません。真夜中のこのムチャクチャな要求に騒ぎも混乱も起こしませんでした。いやあ、日本政府にもああいっただ人材が欲しいものです。

堅太郎 お前……。

毅 感心してる場合じゃないだろう。

巳代治 ……すいません。

堅太郎 しかし何者だ？その女将は。

巳代治 ただの旅館の女将じゃないことは確かですよ。

毅 うん。

伊藤 ただの旅館の女将だよ。

驚く三人。伊藤、蒲団を跳ね除けて出てくる。

三人 い、伊藤さん！

伊藤 伊藤です。

堅太郎 何やつてるんですか、こんな所で。

伊藤 横濱の飲み屋で井上君に言い忘れた事があつてね。脅かしてやろうとコソソリ忍び込んだところがこの騒ぎじゃないか。……もう出るに出不れず。

巳代治 ずっと聞いてたんですか？そこで。（伊藤が潜んでいた蒲団を示す）

伊藤 おう。（目を閉じて同時に頷く毅、瞠目する巳代治）

堅太郎 人が悪いなあ。

伊藤 巳代治、俺を盗人扱いしおつたな。

巳代治 いや、そういう積もりじゃ。

伊藤 悲しいなあ……年若いお前をここまで取り立ててやったのはこの俺じゃないのか？

巳代治 いや、まあ……それは単にこの場の状況的にですねえ……一番ありえない人間を疑ってみるとというのが捜査の鉄則……。

伊藤 言い訳すんなや。

巳代治 はい。

伊藤 まあいいや。お前らしいよ。理屈に合えば恩人だって盗人としてぶった切る。…まった  
く怖えや最近の若えのは。

巳代治 …伊藤さん。(落ち込む)

毅 ところで…。

伊藤 うん？

毅 伊藤さん、こちらの女将を知ってるような口振りだったじゃありませんか。

伊藤 …うん。

堅太郎 ほう…。

毅 どういったご関係で？

伊藤 いやいやなに…昔のコレでね。(小指を立てる)

堅太郎 へ…相変わらずの男前で。

伊藤 昔から肝の太い女だったか…いやあ、出世したもんだ。女将とは。

堅太郎 しかし内閣総理大臣がこうも誉めるとはね…。

毅 ああ、巳代治じゃ太刀打ちできないはずだ。

巳代治 …。

堅太郎 しかしどうします？このままじゃ夜が明けちゃう。

毅 うむ、どうにか憲法紛失を気取られぬよう一騒動起こさねば…。

堅太郎 したところがその女将…ちよつとやそつとの玉じゃありやせんぜ。

毅 ああ。

伊藤 諸君、女将は味方だよ。

堅太郎 は？

伊藤 私がいる限りに於おいてはな。

巳代治 …ははあ、なるほど。(大袈裟に納得する)

堅太郎 どういうご見で？

伊藤 何もこの宿に混乱など起こさなくてもよい。女将にそれとなく宿中を探ってもらえばいいのだ。

毅 ほう。

伊藤 あの女将なら絶対に秘密も守る。憲法紛失が公になることはない。私が頼んでやる。

巳代治 さすが総理です。

伊藤 嬉くねえなあ、おめえに誉められてもよ。

巳代治 ……。

毅 しかしそんなこと可能なんですか。

堅太郎 そうですよ。まさか客室を残らず家捜しするつてワケには……。

巳代治 いや、あの女将ならば可能です。

堅太郎 おう、やけに買うじやないか。

毅 根拠は？

巳代治 聞くだけ野暮ですよ。あの女将なら可能なんです。実際に会って見なければあの器

の大きさは分かりません。

伊藤 まあ、そういうことだな。

巳代治 では総理、お願いします。総理の手管と人脈で憲法草案なんてあつという間に見つかりますよ。

伊藤 まったく調子のいい野郎だな。おめえは。

巳代治 へ……。

伊藤 分かったよ。俺が憲法を見つけて来りや盗人疑惑も晴れるつてもんだろが。

毅 そりゃまあ。



巳代治 もちろんですよ。

伊藤 じゃあ、ちよつくら行つて来るか。巳代治、酒。

巳代治 はい。

巳代治、伊藤に紐のついた大徳利を渡す。伊藤、見栄を切つて調子良く肩に掛ける。

伊藤 じゃあ諸君、朗報を待ちたまえ。

伊藤、笑いながらリズムカルに階段を下りていく。顔を見合わせる三人。へたり込む巳代治。

巳代治 …。

毅 行つちやつたね。

堅太郎 うん。

巳代治 知つてたんですか。

毅 ん？

巳代治 あのオヤジがその中(蒲団)に潜んでいたのを知つてたんですか、井上さんは。

毅 ああ、まあ。

巳代治 じゃ、教えてくださいよお。言っちゃったじゃないですかあ、伊藤さんが盗人だつてえ。

毅 だつて、お前が止める間もなくペラペラと。

堅太郎 巳代治、ホントにそんな事言ったのか？

巳代治 ……。

毅 ……言った。

堅太郎 気をつけなさいよ。誰が聞いているか分かんないんだからさあ。

巳代治 アア…どうしよう。今まで積んで来た僕の華麗なるキャリアが…。

堅太郎 お前は今まで伊藤さんに重宝がられてここまで出世できたんだからな。…その伊藤さんに嫌われたとあつちや…。

巳代治 ぐわー、許してください！

毅 でも、今しがたは上機嫌だったじゃないか。

巳代治 許してもらえますかね？

堅太郎 無理じゃない。

巳代治 ぐわー。

毅 おい、あんまりイジメるなよ。

堅太郎 へ…。

毅 しかしな…。

堅太郎 はい？

毅 巳代治の予想、案外と当たっているかもしれないぞ。

二人 え…。

堅太郎 ……というと。

毅 憲法を盗んだ下手人は伊藤さんじゃないかってコトさ。

伊藤の旦那、自分が憲法を見つけてくると豪語して、自信たつぷりにこの部屋を出て行ったな。

堅太郎 ええ。

毅 ありや予め憲法が何処にあるか知っているゆえの自信と考えられなくもない。ひよつとしたら女将もグルかもしれないぞ。女将に命じて憲法を…この人を馬鹿にした置物（こけし）とスリ替えさせる。憲法紛失はスキヤンダルだが、少なくとも伊藤さんのお気に召さない憲法が、この日本に施行されることはなくなる。

堅太郎 しかし…。

毅 そこを巳代治に見透かされて旗色が悪くなった。で、盗まれた憲法、取り返してやる

ぞと恩着せがましく言い放ち……いけしやあしやあとそこな階段降りて行く。そして女将に命じているのさ。憲法返せと……今頃はね。

堅太郎 いや、しかし……。

毅 動機は十分だ。それは情熱だ。憲法制定に対する伊藤さんの生真面目さ、誠実さ、これはあまりにも強すぎた。強すぎるほどに！

堅太郎 しかし！

毅 しかし……何だね。

堅太郎 それは……あなたも同じでしょう。

毅 ……。

堅太郎 ……井上さん。

毅 ……。

堅太郎 我々は志を同じくしてこの宿に集まった。それは近代国家の体裁を具えながらも日

本人の歴史に根ざしたコンステイテューション、憲法を書き上げるためだった。同じ処を  
目指して出発した我々だったが、あなたと伊藤さんの意見には微妙なズレが存在し……

それは時間とともに拡大した。

巳代治　伊藤さんは日本の歴史を視野に入れつつも、西洋人の常識に照らして無理のない憲法を作ろうとしたんだ。西洋人に追いつこうとしたんだよ。それに反して井上さんは……

堅太郎　日本に回帰しようとした。……あなたは純粋に日本人の為の憲法を作ろうとしたんだ。

巳代治　それに対して伊藤さんは真つ向から反対した。伊藤さんが議会の権限を強めようと言えばあなたは弱めるのが妥当と譲らず、伊藤さんが政党内閣に言い及ぶとあなたは時期尚早だと言い張った。

堅太郎　あなたは似てるよ、伊藤さんと。その意見の十中八九は同じだといつていい。だが……十中一つ二つの違いを許しあうことが出来なかった。そう、全く譲らなかったね、お互いに。

巳代治　……だから中途半端になった。……真面目すぎるんですよ二人とも。

毅　……

堅太郎　伊藤さんだけじゃない。あなたにも憲法を盗む動機は……ある。

毅　……いかにも、君の言うことは尤もらしいな。

堅太郎 …。

毅 しかしね、考えてもみたまえ。巳代治が憲法をしまつてから今の今まで、君らはずつと私と一緒に居たじゃないかね。私に何時いつ憲法を盗む暇があつたというのか。

堅太郎 外部に協力者がいたのかもしれない。

毅 協力者？

堅太郎 伊藤さんが憲法を盗むために女將を使つたのだと…あなたが想像を巡らしたように。あなたにも他に協力者がいたのではないか？そして憲法が見つかったあと大騒ぎしてやればあなたに盗人の嫌疑が及ぶことはなくなる。

毅 君…堅太郎よ。君はそこまでこの私を疑うのかね。では、憲法がなくなった時に私が必死に探し回つたのも、宿屋に混乱を起こすプランを考えたのも、ありやみんな私の演技だつたと言う積もりなのかね。

堅太郎 一番ありえない人間を疑つてみるというのが捜査の鉄則ですからね。

毅 ……よろしい。そこまで言われたらば、もう私にも盗人の疑いを晴らす手段はないな。

巳代治 まあ、お二人とも。自由民権派の連中が盗んだのかもしれないんですから。…もう犯人探しみたいな真似は…。

毅 いや、巳代治。私も伊藤さんを疑つたのだ。私が疑われてもこれは仕方がない。……しかしね、私が犯人でないことは私が良く知っている。……だから早く盗人が捕まることを祈るばかりだよ。そして犯人が伊藤さんであつたなら、私は彼を許すことが出来る。

巳代治 ……？

毅 下手人が自由の民権派のといつた奴輩やつぱらであつたら、これは八つ裂きにしても飽き足りない。……しかし伊藤さんは仲間だ。神経を極限までスリ減らせて議論し……憎しみ合いもした。だがそれは、共に憲法制定という大目標に向かつて一切妥協しなかつた故だ。伊藤さんが憲法を盗んだのなら、私はその気持ちを良く理解できる。逆に私が下手人だつたのなら……伊藤さんは私の行動を咎とがめはしないでらう。

毅、突然腰を落とす。胡坐あぐらを掻いて目を閉じる。

毅 伊藤さんを待とう。伊藤さんが憲法を持って帰ってきたら俺はそれ以上追及しな

い。あの人に対する疑いは消えないが……伊藤さんが犯人でも俺はそれを許す。

俺が疑われている事に関しては言い訳しないよ。俺の手下が憲法を持ち去ったというのなら、今にこの名物女将に引き据えられて出てくるだろう。なにせこの宿の周りは警察がとり囲んでいるんだからね。逃げ場はない。その時は俺も素直にお縄を頂戴するでしょう……。

毅、堅太郎に向き直って両腕を差し出す。

堅太郎 井上さん……。

毅、正面に向き直って胡坐を掻いたまま、また目を閉じる。

堅太郎 じゃあね、井上さん。こういうのはどうでしょう。

毅 ……。

堅太郎 もう一度作りましょう。憲法。

巳代治 え！？



堅太郎 盗まれた憲法は七章立ての全七十六條。内容は皆大体覚えていきますからね。今から書き出せば明日の朝には書き終わりますよ。それに…。

毅 …。

巳代治 …それに？

堅太郎 重要な部分は皆で知恵を出してもっと素晴らしい内容に変えてしまおうんです。そうすれば、盗まれた憲法が公になっても本物ではないという言い訳が立つじゃありませんか。

巳代治 …ふむ。いいですね、それ。

堅太郎 どうですか、井上さん。

毅 …伊藤さんはどう思うだろうか。

堅太郎 賛成するに決まってるじゃないですか！今までの憲法には不満なんですから、伊藤さんは。

毅 …うん。

堅太郎 そして、それはあなたも同じでしょう。井上さん。

毅 …。

堅太郎 もう一度、あなたの意見を憲法に反映させるチャンスですよ。

巳代治 ……イイ、イイなあ！やりましたよ、井上さん。

毅 ……。

巳代治 誰が盗人だとか、誰が伊藤さんを盗人扱いたとか…いやあ、まったく不毛だ。実りのない議論ですよ。新しい憲法草案を書いて、そういう行きがかりは全部チャラにしようじゃありませんか。これは伊藤さんにとつても井上さんにとつても利益のあることですよ。これで皆幸せになれます。もちろん僕も。

堅太郎 やりましょう！

毅 ……素晴らしい内容に書き換えるんだね。

堅太郎 はい！

毅 どういうのが素晴らしい内容なんだい？

堅太郎 は？

毅 伊藤さんみたいに欧米にへつらった憲法をまた書き直すのかね。それともこの井上の理想とするような国柄重視の…欧米人から見れば江戸時代の旧弊を引きづった野蛮人憲法を良い憲法とみなすのかね。

堅太郎 それは…。

巳代治 その両方を満足させるような新しい憲法を作るんですよ。

毅 それじゃ中途半端なんだろ。俺と伊藤さんの中間なんだろ？

巳代治 え…ああ、いやあ。

毅 ……所詮は元の木阿弥だ。何度書き直そうと伊藤さんと俺の意見は噛み合わない。

お前らあの憲法の内容覚えてるよな。

巳代治 ええ、まあ。

毅 じゃあ、そっくり同じものをもう一つ作つたらいい。条文の言い回しだけちよつと変えろよ。盗まれたやつと一緒にマズイからさ。あの憲法がどうしても見つからなきゃあそいつを東京に持って行こうぜ。

巳代治 ……井上さん。

毅 俺は伊藤さんを待つよ。…もう議論は尽されたんだ。

巳代治 ……

毅 伊藤さんの立場は理解する。だが…主張しても主張しても…俺のアイデアは通らない。あんな議論はもう沢山だ。

堅太郎 ……巳代治。

巳代治 はい。

堅太郎 じゃあ井上さんの言う通り、俺達だけで憲法の作り直しと行こうじゃないか。

巳代治 え！？

堅太郎 不貞腐れてる井上さんなんか放っておけ。(毅、少し堅太郎を睨む)それよりも俺達  
若者が憲法制定に積極的に関われる機会じゃないかね、これは。

巳代治 若者？

堅太郎 そう、俺達三十台が…。

巳代治 一緒にされたくないなあ…。

堅太郎 細かいこと気にするんじゃない。

巳代治 はい。

堅太郎 それより筆と硯すずりを持って。あと原稿用紙。

巳代治 はいはい…。

巳代治、筆と硯と原稿用紙を用意する。

堅太郎 じゃあ行くぞ。第一条。

巳代治 第一条。

堅太郎 大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す。

巳代治 大日本帝国は万世……。

毅 大日本帝国は……。

巳代治 ……？

毅 ……。

巳代治 大日本帝国は……。

毅 大日本帝国は……。

巳代治 井上さん？

毅 ……大日本帝国は万世一系の天皇の治す所なり。

巳代治と堅太郎、顔を見合わせる。

巳代治 本当は入りたいんですか？仲間に。

毅、コクリと頷く。

巳代治 何だ、じゃあ早く言ってくればいいのに。

毅 目の前でそんな話をされたんじゃ口を出さんわけにはいかんよ。

堅太郎 そう来ると思っていました。

毅 ……しかし、こんな俺の意見が前面に出た憲法を見せたらまた伊藤さんと口論になりやしないかね。

堅太郎 その時はその時ですよ。あとで伊藤さんに添削してもらえばいい。

毅 うーん。

堅太郎 一度は伊藤さんの意見ばかりが罷り通った憲法まかじゃないですか。この書き直しで井上さんの考えが少しでも残れば、これはひとつの成果と言うべきではありませんかね？

毅 ……うん。

堅太郎 やりましょう。井上さん！

毅 ……そうだね。

毅、立ち上がる。

毅 やるか！

堅太郎 そうこなくっちゃ！よし、巳代治、これから井上さんが喋ることをドンドン書き留めろ。

巳代治 はい！

堅太郎 では、参ります。内閣について、第三十三条。

毅 内閣は天皇臨御して万機を親裁するの所とす。

堅太郎 異議は！

巳・堅 なし！

堅太郎 次！続いて第三十四条。

毅 行政の詔旨は大臣各省卿勅を奉じ名を署して行下す。奉勅の大臣省卿は専ら其責に任ずべし。

堅太郎 異論は！

巳・堅 なし！

堅太郎 憲法第一条。

毅 大日本帝国は万世一系の天皇の治す所なり。

堅太郎 異存は。

巳・堅 なし！

毅 うわー、きもちいいー。

堅太郎 ものすごい軽快ですねえ。

巳代治 こりや伊藤さん帰ってこないほうが良い憲法できるかもなあ。

三人 わはははは。

三人、上機嫌。「冗談が過ぎるぞ」などと言って笑い合っていると、そこに「ただいまあ」と言って

伊藤が帰ってくる。慌てて口を噤む三人。

巳代治 お、お早かったですね…。

伊藤 うん、ちよつと待っててよ。今探してるからさ。

堅太郎 あの…伊藤さん。





伊藤 いい心がけじゃねえか。

巳代治 は。

伊藤 そんなことじゃ俺怒んねえよ。

巳代治 いや…まあ折角探してもらって…ねえ。

伊藤 じゃあさ、見せな。

堅太郎 え？

伊藤 憲法書いたんだろ？

堅太郎 あ、ああ。

伊藤 それから筆な。

堅太郎 はいはい。

堅太郎、巳代治の前にある原稿用紙と筆を奪い取り、伊藤に渡す。

伊藤 ふーん、どれどれ。

毅 ……

伊藤 内閣は天皇臨御して万機を親裁する…あ、これダメ。

伊藤、筆を小さく×の形に振る。毅、やや動揺する。

伊藤 内閣が失敗したらどうすんだよ。これじゃあ天皇陛下に政治責任が及ぶじゃねえか。  
毅 …。

伊藤 次。行政の詔旨は大臣勅を奉じ…奉勅の大臣は専ら其責に任ず…か。これもダメ。  
毅 …！

伊藤 これじゃ國務大臣の印鑑一個で陛下の命令が実行されちまうじゃねえか。失政の責任がダイレクトに陛下に行っちゃたらどうするつもりだよ。…もつと責任の所在をばやかさにや。

毅、悔しさに瞬まばたきの回数が少なくなる。

伊藤 次。…大日本帝国は万世一系の天皇の治しらす所なり。論外。

毅 何でき！

伊藤 …。

毅 何でダメなのさ！

伊藤 …井上君。

毅 …。

伊藤 治しらすつて何？

毅 日本固有の統治理念だよ！天皇が仁愛を以つて国を治める！これあるによつて徳川家康が権力を握ろうと、藤原道長が朝廷を牛耳ろうと日本は一つにまとまっていられただ。俺が古文書という古文書を調べ抜いて、やっと見つけ出した日本独自の国の在り方なんだよ。このシラスは。

伊藤 それつて白人に解んの？

毅 そんなこと問題じゃないね！

伊藤 大問題だよ。白人が一発で理解できる憲法を作らなかつたら俺達はいつまでも野蛮人扱いを受けるんだぞ。

毅 構うものか。日本人が魂を失つて西洋文明の奴隷になるほうがよほど恐ろしい。

伊藤 井上君：今、我が国の置かれている状況を理解できているのかね？

巳代治 白人が国内で犯罪を起こしても我々の法律では裁けない。白人が持ち込む商品には自由に税金をかけられない。

伊藤 そうだ、連中のやりたい放題だ。

巳代治 : 文明国は野蛮人を対等には扱わない。

堅太郎 まともな憲法も持たない日本のような野蛮国は、文明の代表である白人の指導に従うべきであるというのが彼らの主張だからね。こちらら戦争じゃ勝てねえからさ：：奴らの言いなりになるしかないってワケで。

伊藤 不良外人どもが：：低関税に守られたバカみてえに安い織物やらご禁制のアヘンやらを平気で日本に売りつけやがる。

堅太郎 インドの経済はそれで潰された。

巳代治 中国も潰されつつある。

堅太郎 いち早く憲法を整備して、わが国の文明化を世界にアピールせねばならない。

伊藤 でなければ次に潰されるのは日本だ。

毅 : 。。。

伊藤 だからよ、西洋人に読ませるときにクドクド説明が必要な文句を憲法に入れんのは

反対なんだ。俺は。

毅 日本が憲法を作ったら、本当に白人は日本を文明国と認めるでしょうか。

伊藤 なに？

毅 日本人の頭から生み出された憲法が日本を近代化し、曳ひいては西洋諸国と互角の

力を持つまでになって、ようやく白人は日本を同列者と認めるのじゃないですかね。

伊藤

…そりゃ私だって、憲法を発布した途端に白人が我々を認めるなぞとは思ってないよ。でもね、今はこの不平等な状況を一日も早く改善しなければならぬ。…白人向けの理解しやすい憲法を全世界に大宣伝してな。それなくして日本の経済発展も産業発展もありえないからだ。

毅

そうして発展した日本の国力は、結局白人が考えた憲法をコピーして作り出された見せかけだけの繁栄になりやしませんか？

伊藤

ふん、繁栄に見せかけもホンモノもあるかね。

毅

白人どもはこう思うでしょう。「日本人は自分でモノを考える力に欠ける」と。西洋のモノマネ社会から生まれた繁栄を彼らは決してストレートには認めないでしょうね。そして日本人の心にはコンプレックスが…今、自分達の暮らしている社会は全部

白人からもらったものだという西洋コンプレックスが……永久に残るのです。

伊藤

では何か。……そのシラスという言葉一つを憲法に盛り込めば大いに国力増進し、白人も日本人に敬意を示すようになる。日本人も西洋コンプレックスを持たなくて済むと？

毅

そうです。

伊藤

馬鹿馬鹿しい。

毅

巳代治、憲法とは何だ？

巳代治

ぼ、僕ですか？

毅

そうだ、言ってみろ。

巳代治

決まってるでしょう。国家の最高法規です。

毅

堅太郎は。

堅太郎

当然巳代治の言う事も正しいのですが……国の在り方を示すものであるとも考えます。つまりその国の歴史の集積であり、慣習を成文化した……。

毅

分かった、もういい。

伊藤

一体何を言いたいのかね。

毅

憲法つてのは普通、殿様の権力を制限するものなんだ。産業革命以来、小金持にな

つた一部のヨーロッパ人民が政治に口を出し始めて、終には国王の権力までコントロールするようになった。それが憲法さ。

巳代治 ああ、そんな説明もできますね。

毅 だからこの国の王様でも憲法制定には抵抗したし、王様が憲法を停止したり無視したりする国も当然あった。だが王様が調子に乗ってやりたい放題を続ける  
と……。

堅太郎 革命が起きる。

毅 そうさ、ギロチンで首を切られかねない。だから仕様がなくて認めたんだけ。王様が憲法を認める時つてのは普通イヤイヤなんだよ。ところがだ、我が天皇陛下はどう  
だい。

堅太郎 御自らが憲法制定に乗り出した。自分の権力を縛りつける憲法をだ。子たる日本  
臣民の為ならばと気前よく賜たまわろうというのだから。

毅 これこそまさに仁愛の統治支配。世界史上例のないことですよ。伊藤さん。

伊藤 ……。



毅

然るに貴方はこのありがたい天皇陛下を飾り物くらいにしか考えておられないのではないか？近代化において国民と対立することのない唯一の君主なのだ。陛下は。

天皇は国政を総攬し、陸海軍を統率する。が、力の統治にあらず。飽くまで仁愛

で以って我ら臣民に臨む。この稀に見る国体でもって西洋社会からユニークである事

こそ日本が日本たる道である。

伊藤

…。

毅

必然、憲法もこれを反映する。君主権を制限して実現した西洋の国家とはまた別の国民国家を目指したいんですよ。私は。日本らしい憲法があつて、はじめて日本人も独立の気概を持つことが出来るのではないですか。

伊藤

意見が合うね、井上君。

毅

なに？

伊藤

私も常々日本は日本らしい憲法を持つべきだと考えていたんだよ。

堅太郎

ほう。

毅

ふん、あなたの考える憲法にどんな日本らしさがあるというのか。

伊藤 よく考えてみる。平安時代の藤原摂関家から徳川将軍の世が終わるまで、天皇が直接政治に関わった例がどれほどあるか。

巳代治 ああ、なるほど。日本の政治はほとんど摂政関白か将軍家が司っていましたからね。

伊藤 とはいえ、天皇の命令が一下すれば、いかなる実力者といえどもこれを軽視できず。

やはり朝敵とされることを恐れたし、蔑ろにした者は国中から敵視された悉く滅んだ

でいる。…それだけの影響力があるんだよ。天皇の命令というのは。

毅 …。

伊藤 そこで君の憲法草案に目を移すが(巳代治がメモしていた原稿を見る)…なんだね、内閣は天皇臨御して万機を親裁する？あまりに軽々しいではないか。陛下が閣議にお出ましになつて毎度発言されるのか？一政治家のように？

毅 …。

伊藤 危険すぎる。これでは陛下の御威光が政治利用されてしまう。それよりも我々は陛下をお守りするべきだ。憲法によって。

堅太郎 憲法によって…守る？

伊藤 そうだとも。陛下のご発言や権限の行使は、憲法が定めた規定に沿って行われ、枢

密院や元老院によくよく相談された上で為なされるべきだ。不規則なご意見の表明などもつてのほか。

毅  
しかし！

伊藤  
：：なんだね。

毅  
しかしそれでは：：陛下より先に憲法があることになるではないか。

伊藤  
：：それは大きな誤解だ。しかし如何いかに天皇陛下といえど、憲法というシステムがある以上これに従うべきだ。：：なぜならそれこそ世界の傾向だからね。：：もはや国王が絶対的な権限を振るう国家はヨーロッパによつて野蛮とされているのだから。

巳代治  
憲法を立て、その憲法に従う君主。

四人  
立憲君主！

伊藤  
これこそ、世界も日本国民も：：我々も天皇に望む姿なのではないかね？

毅  
伊藤さん：：あなたの考えは一つ大きく掛け違っている。

伊藤  
なに？

毅  
天皇は国家機関ではない。

伊藤 当然だ。

毅 しかしあなたの意見を聞いていると、まるで天皇陛下が憲法に従って動く単なる機関であるかのようだ。

伊藤 そのようなことは……

毅 天皇は憲法を運用すべき存在だ。憲法に操縦される存在ではない。それが私の考える立憲君主だ。

伊藤 その考えには賛成できんな。天皇の行動は臣民にとって絶対的な重みを持つている。その大きさを国家機関に例えるつもりなどサラサラない。ただ、天皇が自由な意志に基づいて行動するようになれば、逆に国政をかき乱す結果になるだろう。天皇は……繰り返すが、憲法というシステムに沿って行動するべきなのだ。だからこそ立憲君主なのだ。

毅 巳代治……メモを取れ。

巳代治 は……はい。

毅 天皇は……

巳代治 ……天皇は。

毅 天皇は立憲君主である！（傍点強めに読む）

伊藤 巳代治、続けて取れ。

巳代治 はい。

伊藤 天皇は……。

巳代治 天皇は……。

伊藤 天皇は立憲君主である！（傍点強めに読む）

巳代治 それどう違うんですか？

毅・伊 全然違う！

巳代治 ええ……。

堅太郎 ああああああ！

三人 ……。

堅太郎 ああああああああ！

毅 ……ど、どうした？ 堅太郎。

堅太郎 どうして、どうしてお前らはそうなんだ！

毅 ……なにが？

堅太郎 みんな思いは同じなんだ！ 欧米に負けない憲法を作りたいだけなんだ。日本の国柄を堂々と盛り込んだ憲法を作りたいだけなんだ。それがどうしてだ！ 伊藤さんも井

上さんも。何で仲良く出来ないんだ！

毅 仲良くつてお前……。

巳代治 そうですよ。こんな四十過ぎのオヤジに使う言葉じゃないですよ。

毅 ……。

堅太郎 私がどんな思いで……。 (堅太郎、頭を抱える)

伊藤 堅太郎、落ち着け。

堅太郎、顔を覆ったまま自分の懐に手を入れる。掴み出したのは原稿用紙の束。震える手で伊藤に押し付ける。堅太郎、そのままちやぶ台の前に座り酒を飲み始める。

伊藤 ……これは。

巳代治 憲法だ！

毅 堅太郎……。

巳代治 どういうことですか！

堅太郎 俺はさあ、ただみんなに仲良くしてもらいたかっただけなんだよね。

毅 ……。

堅太郎 伊藤さんも井上さんもさあ、仲間割れしてる場合じゃないよ。欧米列強の脅威が差し迫っている昨今。

毅 誰が仲間割れをした。

堅太郎 見りや分かるよ。誰が見たって仲間割れだよ。国の在り方とか天皇の位置づけとか重要だけどき。目指してるところは一緒じゃん。…憲法運用するのは人間なんじゃないの？人の和が大事なんじゃないの？

俺としてはさ、この明治の世を担っていく総理大臣とその優秀なブレイン達にね、ケンカして欲しくないわけ。わかる？…だからさ、盗んだんよ。憲法。

毅 理由になつてないぜ。

堅太郎 なつてますよ。外部からもたらされる危機はチームを団結させるんだ。敵を外に作る。国をまとめる原則じゃないですか。井上さんともあろう方が…お忘れですか？

毅 あのなあ、俺と伊藤さんのまとまりなんてこの国にとつちやどうでもいいことなんだよ。それでいい憲法が出来るんだつたらこのオッサンとの関係なんて犬にでも食わせ  
て…。

巳代治 自分だつてオッサンのくせに。

毅、巳代治を睨む。

堅太郎 いい憲法、できましたか？

毅 …。

堅太郎 結局、伊藤さんと井上さんの綱引きになっちまってるね。中途半端な憲法になっちまってるませんか？

巳代治 なっちやってます。

毅、巳代治を睨む。

堅太郎 議論に熱心なのは結構だ。しかし最終的に和の精神がなければいけない。我々日本人は和を尊ぶ民族なんだから。それを弁えない人間が日本の憲法を議論すべきじゃない。

伊藤 それで書き直そうとしたのか。憲法を。

堅太郎 そうです。

伊藤 巳代治。



巳代治 はい。

伊藤 女将に伝えてくれまいか。探し物は見つかった。これ以上の隠密真似事は無用。よく眠ってくれ、と。

巳代治 かしこまりました。

巳代治、一礼して階段を下りていく。

伊藤 ……堅太郎。

堅太郎 ……。

伊藤 すまなかった。

堅太郎 伊藤さん。

伊藤 我々は一つ大事なことを忘れていたね。

毅 大事なこと？

伊藤 日本人は和を重んずる。

伊藤、正面に向き直る。もはや観客に語りかけていただきたい。

伊藤 日本は建国以来、一度も滅んだことがない。国が乱れることもあったし、他国に攻め

込まれそうになったこともあった。その度にこの国は滅亡の憂き目を見そうになったが、  
どうかここまでやってきた。それは外国に恫喝されても、地方地方に大名が相争って  
も結局、「我々は日本人だ」といううっすらした自覚がこの土地に住まう人々の中にあ  
ったからだ。常に。：恨みあい、互いに殺しあうことも、裏切ることもあった。だが、こ  
の二千年、我々は最後には団結し：相和してきたのではないか。

堅太郎 そうです。伊藤さん。そうですとも！

伊藤 これを忘れて憲法作ったらダメだね。

毅 そうですな：我々は少し意固地になっていたかもしれせん。

堅太郎 憲法学者を自認する我々自身が相和することを忘れていたんですからね：これ  
は……。

三人、徐々に笑い出す。やがて哄笑に。

伊藤 じゃあ、続きやるか？

堅太郎 続き？

伊藤 憲法草案、書き直すんだろ。

堅太郎 ああ、ですね。

伊藤 この上はもつと互いの意見を尊重したものを作れるんじゃないかな。  
毅 ……

堅太郎 じゃあ筆と原稿を。

伊藤 おう、気が利くな。

堅太郎 そのうち巳代治も帰つて来ますから四人で…。

毅 いや…。

堅太郎 え？

毅 その儀はしばし…。

堅太郎 井上さん…。

毅 堅太郎、確かにお前の言う通りだ。

伊藤 どういう事だね。井上君。

毅 憲法は運用が命。…そんなこと、言ったよな？

堅太郎 ああ…はあ、まあ。

毅 その憲法草案は、我々四人の命を削って書かれたものです。内容は…確かに中途半端な部分もあると思われます。…しかし、それは我々が全力を出し切った結果、ギリギリの妥協だった。そうでしょう。

伊藤 ……そうだね。

毅 それよりも、私が怖いと思ったのは手加減です。

伊藤 ふむ。

毅 馴れ合うということが相和するという事ではない。互いの意見を尊重するのも結構だが、そういった姿勢で書かれた憲法が、この憲法（目の前の冊子を示す）を越えるものになり得るとは…私には思えないのです。

堅太郎 勝手じゃないですか！先刻は散々伊藤さんの意見ばかりが載っているこの憲法を詰なめていたくせに。今度はその憲法を擁護するんですか！

毅 すまん。だって、そう思っちゃまったんだよ。

伊藤 確かにな…。

堅太郎 伊藤さん。

伊藤 俺達は意見を戦わせることで、この憲法を磨いてきた。そりゃ俺達がそういう人間

で、そういうやり方しか出来なない因果な性格だったからさ。そういう人間に突然  
相和せて言われてもな……こりや白々しい。

毅 ええ……相和することが重要だつてのは判つてるんだぜ。堅太郎。

堅太郎 ……。

伊藤 しかしな……どうするんだね。じゃあ憲法を書き直すのはナシだ。その先は？

堅太郎 そうですよ。まさか中途半端なこの憲法を、東京に持つて行く気じゃないでしょうね。

毅 その積もりだ。

堅太郎 な……。

毅 ただし……その憲法には説明書を添付する。

伊藤 ほう……。

堅太郎 説明書？

毅 この条文の、この意味はこう……この部分はこういう積もりで書いた……。それをイチイ  
チ解説した憲法マニュアルだな。……そいつを、私に書かせてください。伊藤さん。(毅、

頭を下げる)

伊藤 …。

毅 憲法は運用が命。ほんの二、三行の短い文章をどのように解釈するか…。それが国を繁栄にも導くし滅亡にも導く。…憲法はあんたが書いた。こりやほとんどあんたの意見だ。

伊藤 …。

毅 しかし、この憲法をどうやって解釈するか。その判断は…この井上にやらせて下さい。それでおあいこにしましょう。

伊藤 …。

毅 お願いします。

堅太郎、黙り込む伊藤と頭を下げる毅をオロオロと見ているが、やがて伊藤に頭を下げる。

伊藤 いいんじゃない。

毅、嬉しそうに顔を上げる。

伊藤 やんなよ。好きなように。

毅 本当ですか？

伊藤 そのかわり解りわかやすくな。…西洋人にお披露目ひろめする時にくつつけるからよ。

毅 はい！

堅太郎 已代治に翻訳させるつてのはどうです。

伊藤 いいね。俺は年寄りだしかったるいからさ。そうだ、あいつにやらせよう。

堅太郎 はは、喜びますよ。

毅 ありがとうございます。

伊藤、礼は無用とばかりに掌をゆらゆら揺らす。

堅太郎 じゃあ早速已代治に教えてやらなきや。(堅太郎、立ち上がって階段を下りようとする。)

伊藤 だな。

堅太郎 ついでに酒買ってきます。宴会でもやり直しましょうや。

伊藤 おう、いいね。

堅太郎 では、名物女将の顔でも拝んできますか。

伊藤 はは。

毅 ……ふむ。(毅、腕を組んで怪訝な顔をする)

堅太郎 どうしました？井上さん。

毅 ……ちよつと、遅くありませんか？巳代治。

堅太郎 ……そういば。

伊藤 ……。

堅太郎 なに、酒の追加でも頼んでるんじゃないですか。気の利くヤツですから。

毅 ……。

堅太郎 下手したらキレイどころの二、三人は手配してるかもしれませんよ。

……ここで息を切らし、巳代治が階段を上がってくる。手には原稿用紙の束が握られている、

巳代治 伊藤さくん。



堅太郎 来た。

伊藤 巳代治、ご苦労。

巳代治 いえ…伊藤さん。それが…。

伊藤 ?

巳代治 もう一つ…。

毅 …なに？

巳代治 憲法がもう一つ…。

三人 なに！

巳代治、原稿用紙の束を差し出す。

巳代治 下りてすぐの廊下で女将にばったり。憲法ありましたよと、言おうと思ったその矢

先、目の前にグツとこいつを突きつけてくるじゃありませんか。もう驚いたの驚かないの  
つて、見つけたばかりの憲法がどうしてここに！？

堅太郎 で、内容はどうなんだ？

巳代治 100%僕らが書いていた憲法と同じものです。

毅 どういうことだ。

巳代治 一つしかないものを二つ見つけてくるんですから。やはり只者じゃありませんよ。あの女将。

伊藤 巳代治、女将はそいつをどこから見つけてきたんだ。

巳代治 落ちてたそうですよ。

堅太郎 落ちてた？

巳代治 ええ、裏の畑に。この袋に入っていたそうです。

巳代治、以前に憲法を入れた袋を取り出す。

毅 しまった袋までソックリか。

巳代治 ええ。

堅太郎 まさかこつちが本物なんじゃあるまいな。

巳代治 だとすると……。

堅太郎 どうした。

巳代治 一緒に入れていた財布がごっそり盗られていますね。

伊藤 この間渡した100円か？

巳代治 ええ。伊藤さんにもらった小遣い。

堅太郎 どうすんだよ。大金だぞ！―それじゃ酒も飲めんし芸者も呼べんじやないか。

伊藤 いいよ。ツケで飲もうぜ。

堅太郎 おお、さすが総理大臣。

伊藤 百円、二百円でオタオタすんなや。

堅太郎 いやあ、一瞬本気で心配しましたよ。

伊藤・堅わはははは。

毅 何の心配をしてるんですか。

伊藤 ユーモアだよ井上君。ピンチのときこそユーモア。(伊藤、新しい憲法を拾って読み始める)

毅 …。

堅太郎 …しかしねえ。

毅 うん？

堅太郎 憲法も無くなったならオオゴトですけど、いっぱいある分にはイイじゃないですか。

毅 馬鹿野郎。一個しか作つてない憲法があつちこつちにあるって事は情報が漏れてるって

事だぞ。

堅太郎 あ、なるほど。

毅 自由民権派が憲法の内容を持ち出そうとしたに違いない……。

堅太郎 いやあ、考えすぎじゃないかなあ。だって畑に捨ててあつたんですよ。

毅 うーん。

堅太郎 コソ泥が我々の小遣いを狙つたに決まつて……。

毅 いやしかし……それ以上にどつちが本物なんだ。

巳代治 とにかく字の形や位置までそっくりに書いてあつて……。

堅太郎 素人目には区別がつかんか……。

伊藤 巳代治。

巳代治 はい。

伊藤、巳代治の頬をはたく。

毅・堅 !

巳代治 ……。

伊藤 俺の目を節穴だと思ったか。

巳代治 …。

巳代治、目を閉じて微動だにしない。啞然と見つめる毅と堅太郎。巳代治、静かに笑い始める。笑いは次第に大きくなる。見つめる伊藤。巳代治の笑い、狂気すら感じるほどに激しくなる。

堅太郎 おい、巳代治…。

巳代治、懐から冊子を出す。皆の面前に放り投げる。

毅 …これは。

堅太郎 憲法！

伊藤 …。

堅太郎 憲法が三冊！

巳代治 はははは…はははは！

毅 巳代治、こりやどういうことだ。

巳代治 堅太郎さん、あなたが盗んだ憲法ね。それニセモノですよ。

堅太郎 何！

巳代治 本物はコレです。コレ。(今、足元に放り投げた冊子を指差す)

堅太郎 これが…？

堅太郎、足元の冊子を拾い上げる。

巳代治 見たつて区別はつきませんけどね。墨の濃さから筆跡まで、判で押したように複製しましたから。

堅太郎 …ほんとだ。井上さんが酒をこぼした跡まで…。(自分が盗んだモノと見比べる)

毅 …。

伊藤 憲法をニセモノにすり替えて…どうするつもりだった？

堅太郎 そうだよ。何でこんなことを！

巳代治 …みんなにね。ケンカして欲しかったんですよ。

毅・堅  
！

巳代治 憲法紛失がスキャンダルになって欲しいとさえ願っていました。自由民権派に憲法を  
売ろうとしたんですよ。伊藤さん。

伊藤 ……。

堅太郎 バカナ！狂ったのか。巳代治。

毅 俺達は今や一蓮托生なんだ。憲法紛失はこの伊藤グループ全員のスキャンダルになる  
んだぞ。それに…。

巳代治 分かってますよ。僕がここまで出世できたのは二十歳前から目をかけてくれた伊藤さ  
んのお陰ですからね。

巳代治、伊藤に慇懃な一礼。

巳代治 僕個人のスキャンダルなら大したことはないでしょうけど…伊藤さんが政治家として  
失脚したら…。僕も政治的には再起不能です。

堅太郎 分かっているならなんでこんなことを…！

巳代治 …伊藤さんですよ。

堅太郎 なに！？

巳代治 伊藤さんが悪いんだ…。

堅太郎、伊藤と巳代治の顔を交互に見る。

巳代治 僕以外の人間を…傍に置いて…使ったから。

伊藤 …。

伊藤と巳代治、睨み合う。

毅 僕以外の人間って…お前。

堅太郎 まさか俺達？

巳代治 あなた方以外の誰がいるんです。

巳代治、伊藤に向き直る。

巳代治 伊藤さん。僕はあなたの…後継者になりたかったのに。



全員沈黙。

巳代治 あなた方が現れるまで……僕は伊藤さんの門下では不動のNo. 1だった。……なのに、この憲法なんてものを作り始めた時から……我々の関係は変わってしまった！

巳代治、毅と堅太郎を交互に見渡す。

巳代治 楽しかったよ。この4人で憲法を議論するのは。しんどかったけどさ。刺激的だったね。同じ知的レベルの人間と会話するつてのはスリリングで。……伊藤さんもイキイキしちゃつてさ。徹夜して、口論して、わめいて、酒飲んで、怒って、暴れて、また飲んで、嬉しそうだった。僕も嬉しかったんだよ。最初は。でもね……。

巳代治、一気に表情が変わる。

巳代治 疎ましくなったんだ。ソレが。

…。  
…。

優秀だよ…あんた方は。この僕から見ても惚れ惚れするほど有能だ。そして僕より年上だ！

堅太郎 …は？

巳代治 僕はね…総理大臣になりたかったんだ。伊藤さんの後継者として。でも…あんたらが入ってきたもんだから。

伊藤 俺の門下でN〇. 1のキレ者が一番の若輩者になっちゃった。

巳代治 そうさ！これじゃ総理の椅子は覚束ない。日本の社会システムは年上を追い抜けないようになつてるからね。あんたら（毅と堅太郎を示す）の次を待つてる間に僕はすっかり老いぼれるだろう。伊藤さんが生きてるかどうかだつて分からない。そうなたらこの伊藤派閥の権力構造だつて大きく変わる。下手したら解散。僕は忘れ去られる可能性だつて…。

毅 考えすぎだ。

巳代治 だからね…一度ぶつ壊してやろうと思った。僕たちの関係性を一度このグループごとひねり潰して再構築する。伊藤さんと僕だけの関係性を。

堅太郎 矛盾しているよ。仮に伊藤さんとお前の関係を元に戻したとしたってだな。憲法を自由民権派に売り渡したらそりゃ伊藤さんの失策だ。伊藤さん自体が失脚するんだぞ。そうしたらお前だつて総理大臣にはなれないだろうに。

巳代治 伊藤さんに責任がないとしたらどうです？

堅太郎 何？

巳代治 このグループには憲法の内容を巡って伊藤さんと激しく対立していた方が居りましたよ。ね。一人。

毅 …。

堅太郎 お前…まさか。

巳代治 井上さんが自由民権派にそのかさされて憲法を盗み出したという記事を、政府系新聞に掲載する手筈は整えてあります。これで憲法紛失は井上さん個人の責任。自

由民権派は卑怯者と諍そしりを受けて沈黙。伊藤グループは解散。…伊藤総理と僕だけが無傷で残るといっわけです。

堅太郎 俺は？

巳代治 あなたのごことは考えてなかったなあ。

堅太郎 …。

毅 しかし…何て汚い。

巳代治 政治なんてそんなものでしょう。これだけはどんなに良い憲法が立ったって変わりませんよ。永久に。

毅 じゃあ伊藤さんを盗人扱いたしたのも…？

巳代治 当然あなたと伊藤さんの対立を煽るためですよ。伊藤さんに対する愚痴の一つもこぼしてくれば盗人記事を補強する最高の材料になりますからね。…まさか本人が聞いているとは思いませんでしたが。

伊藤 …。

巳代治 ま、しかしどんなに策略をめぐらそうと…これでお仕舞です。考え抜いたんですがね。お粗末なもんだ。予想外の連続で…。

本物を偽憲法とスリ替えて、翌朝、自由民権派に渡す手筈が…今度は偽憲法が盗まれて中身は謎のコケシに。全く余計なことをしてくれた。(堅太郎を睨む)  
その上、警官隊を呼んで来て包囲網まで…。朝までに連中を解散させないと厄介だ。  
で、女将のトコに行くたびに、急造でどうにかこいつ(2番目の偽憲法)を作りました。  
偽の偽憲法ですな。どうです？二冊目ともなると上手いもんでしよう。

「こいつを朝までに見つかると宿の裏手に放り出しました。ただのコソ泥の犯行に見せかけるために一緒に入っていた小遣いは抜き取る念の入れようですよ。へ。」

「さあ、あとは女将がこれなる偽の偽憲法を……見つけてくれれば万事上首尾、警察解散だ。タカを括ったその途端……あんた（堅太郎）が本物の偽憲法を出してきやがった。」

「僕はもう慌てて宿の裏手に走りましたよ。つまりこの偽の偽……まあいいや、偽憲法その2を回収するためにね。このままじゃ憲法が二冊になっちゃう。……ところが……女将めそいつを見つけて……丁寧に部屋の前まで持ってきてやがった。」

「万事休すだ。憲法が二冊だ。」

「……それでも良かったんだ。自由民権派のせいにして切り抜けようと思った。情報漏洩だ。もう憲法の写しがあつちやこつちやに……つてね。……ちよつと苦しいか。」

「しかし無駄だった。総理は大したもんだ。やつぱり急造は急造ですよ。しつかりこいつ（偽憲法その2）がニセモノだと見抜いちまった。……どこが悪かったんだろうね。紙が新しすぎましたかね……墨が乾いてなかったですかね……あ、筆跡だ。総理はオリジナルと微妙に違う筆跡の違いを見抜いたのに違いない。トメとかハネとかハライとか……ニンベンとか……。」

巳代治、完全に現実逃避的な落語調の長台詞。その間に伊藤、巳代治の懐に手を突っ込む。中から派手な財布が出てくる。

毅 あ…それは！

堅太郎 俺達のお小遣い。

伊藤 どうもこいつの懐がチャリチャリ鳴ると思ってたんだよな。

巳代治 筆跡を見抜いたんじゃないや…。

伊藤 いや…。

巳代治 …。

伊藤 …全く同じに見えた。

毅 また自分からペラペラと白状しちまったな。

堅太郎 ただのお小遣泥棒で済んだのに。

巳代治 ぐわー。

三人 …。

呻き続ける巳代治。伊藤、そつと近づき巳代治の肩に手を添える。

伊藤 巳代治。

顔を上げる巳代治。

巳代治 伊藤さん。

伊藤、巳代治の頬をはたく。

巳代治 …。

伊藤 もうするな。

巳代治 …。

毅 伊藤さん。

伊藤 ん？

毅 それで…いいんですか？

伊藤 ……しょうがねえだろう。

巳代治 毅然たる処分を望みます。

伊藤 ……。

巳代治 でなきや、こりや格好がつきませんよ。

堅太郎 何言つてんだよ、巳代治。命拾いしたんだぞ。

巳代治 僕は皆を失脚させようとした。みんな 剩あまごえ憲法を…日本の未来を…不埒な企みの具

にしようとなさえたんだ。それも、自分の出世のため…同僚に対する嫉妬心。ああ、  
つまらない！実につまらない動機だ。

伊藤 ……。

巳代治 格好悪い！…なんて泥臭いんだ。こんなの僕のスタイルじゃない。

堅太郎 ……巳代治。

巳代治 お願いします！

伊藤 ……。

巳代治 僕を…罰してください。

堅太郎 気にすることないさ。誰だつて間違いは犯すじゃない。



巳代治 … 堅太郎さん。

堅太郎 伊藤さんだつて許すと仰つている…。ねえ、伊藤さん…。

伊藤 …じゃあよう。

巳代治 …。

伊藤 一発ずつ殴つてお終いにしようぜ。巳代治を。

三人 え！

伊藤 だつて罰して欲しいんだろ。

巳代治 え…ああ、はい。…でも、それじゃあ…そんな大した罰じゃない？（毅と堅太

郎に目で助けを求める。困惑する二人。）

伊藤 いいよ。憲法でも制定されたらよう。こりや法治国家だからな。簡単にや暴力も振る

えなくなるからよう。なあ、皆。<sup>みんな</sup>

毅・堅 …。

伊藤 今のうちにうんと野蛮人をやつておこうぜ。

巳代治 …。

伊藤 よし、みんな一列に並べ。

毅・堅　…は。

毅と堅太郎、顔を見合わせながら巳代治の前に並ぶ。毅、堅太郎、伊藤の順に並ぶ。

伊藤　やれ。

毅　命令とあらば！（巳代治をはたく）

堅太郎　ごめんよ、巳代治！（巳代治をはたく）

伊藤　信賞必罰！（巳代治をはたく）

巳代治、打たれるたびに呻く。そして伊藤の一撃で吹き飛ばす。

巳代治　ぐう…。

伊藤、座り込んで酒を飲み始める。

伊藤　巳代治、俺はな。憲法なんてでえ嫌れえだ。

毅 え……！

伊藤 俺を誰だと思ってるんだ。最後の維新志士だぜ。戦争にも行ったし人も切った。爆弾で外国の公使館をぶっ飛ばした事もある。テロリストなんだよお。

毅 ……

伊藤 酒は飲むわ、女好きだわ……その俺がだぜ……何が憲法だよ。ちゃんちゃら可笑しい。

巳代治 ……

伊藤 黒船の野郎が来るまでな、憲法なんかなくても日本のお国はようよう回ってたんだ。

井上 ……

毅 はい……

伊藤 お前の言う通りだ。俺は外国の顔色ばかり窺う臆病者だよ。日本人には日本人の原理がある。大昔から、ご先祖様が同意してきた俺達の常識ってヤツがな。

誰に教わらなくても、外国から借りた憲法なんてもんにはイチイチ書き留めねえで

も……そんななあ日本人なら生まれる前から疾うとに知ってるんだよ。

毅 ……

伊藤、酒をあおる。

伊藤 ……だがな……ここは我慢の時だぜ。今、世界は……日本は……外国の勢いに押し捲まくられている。そこで四の五の言ったって駄目だ。一度はな……負けてやろうぜ。憲法でも何でも受け入れてやりゃあいんだ。なあ、堅太郎。

堅太郎 ……はあ。

伊藤 いや、2度3度、負けることもあるかも知れねえ。だが、日本人の原理が近代憲法を……白人の原理を超えて形成される日が必ず来る。その時こそ、日本人は座り心地の悪い西洋の四足チエアーを蹴飛ばしてよ。こうして堂々と畳に座って……おい、お前ら座れ。

毅 あ、はい。

毅と堅太郎、ちやぶ台を囲むように座る。

伊藤 巳代治も座れ。

巳代治、頬を押さえ、体を引きずるようにしてちゃぶ台に着く。

伊藤 そうよ……こうして畳に座って、誰はばかることなく酒が飲めるようになるんじゃないかねえ  
のか？それこそ……

毅 それこそ日本の憲法だと？

伊藤 そうだ。

全員に酒を注ぐ。

堅太郎 日本人が日本人になる。

伊藤 そうだ。それこそ……

伊・毅・堅 それこそ……！（三人、一斉にぐいのみを掴む）

巳代治 それこそ、日本の憲法だ……。（ぐい飲みを掴み、微笑みを浮かべる）

毅・堅 ……

伊藤 乾杯。(伊藤、にやりと笑う)

全員、頭上に杯を掲げる。

完